

日本中東学会ニューズレター

JAMES
NEWSLETTER



No.141
2015/11/10

目 次

第 21 回公開講演会報告.....	1
第 32 回年次大会のお知らせと研究発表の募集.....	7
韓国中東学会国際会議参加報告.....	9
AJAMES 編集委員会報告.....	12
寄贈図書.....	13
会員の異動.....	13
事務局より.....	15
編集後記.....	15

第 21 回公開講演会「イスラームの多様な貌（かお）―共生のための理解

をめざして―」（2015 年 10 月 4 日；福岡）報告

21 回目になる日本中東学会公開講演会を、去る 10 月 4 日、福岡市の九州大学で開催しました。本年度の公開講演会の企画には、開催校である九州大学の大学院人文科学研究院・文学部イスラム文明史学研究室だけでなく、上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻、上智大学アジア文化研究所、東京大学東洋文化研究所、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、地域研究コンソーシアム、京都大学地域究統合情報センターという多数の機関にも共催機関として加わっていただきました。これは、地域研究コンソーシアムの公募事業である学会連携プログラムに名乗りをあげた中東学会の提案が認められ、この講演会の企画が同プログラムの一環としても行われたからです。さらに今年は、西日本新聞社の後援もいただきました。

事前に作成した講演会の案内文は以下の通りでした：

この頃では、インターネットでも、テレビでも、新聞でも、イスラームがらみの怖いニュースを見ないことがないような気さえします。特に IS（いわゆる「イスラーム国」）出現以降、世界のイスラーム主義運動は、以前にもまして理解不能で怖く見えるようになっていきます。同時に、日本に住む私たちが、にこやかに名所巡りやショッピングを楽しむイスラーム教徒の観光客、勉強や仕事のためにご近所に住む礼儀正しいイスラーム教徒の隣人と触れあう機会も、確実に増えてきています。立派な、そして周囲の環境と見事に調和したモスクが福岡（箱崎）に建てられてすでに 5 年以上が経ちます。イスラーム教徒の観光客の誘致に期待する声は、福岡の実業界でも小さくないようです。

世界に 17 億人もの信徒がいるとされる宗教イスラームが、色々な場所で色々な貌（かお）を見せるのは当たり前のことでしょう。そして、全てのイスラーム教徒が IS の構成員のような考え方を持っているなどということがありえないのは言うまでもありません。では、イスラームが持つ多様な貌には、実際にはどのようなものがあるのでしょうか。色々な意味でイスラームのことを知ることが大切になっているいま、イスラームが見せてきた、そしていままさに見せている多様な姿について、日本を代表する第一線の研究者たちと共に考えてみませんか。

日本中東学会では、九州大学イスラム文明史学研究室のご協力を得て、以下の要領で公開講演会「イスラームの多様な貌：共生のための理解をめざして」を開催します。豪華な講師陣が様々なタイプのイスラームのあり方について分かりやすくお話しします。多様な考えを持つ人々のより良い共生を考えるために、講演の中では、それぞれのタイ

プのイスラーム理解を持つ人々が非イスラーム教徒との関係をどのように考えてきたかにも触れることにしています。古代から異文化交流の舞台となってきた福岡の皆さんとともに、よりよい共生を目指してイスラーム理解を深める機会を持てることを関係者一同心待ちにしています。日曜日の午後、どうぞ足をお運び下さい。(案内文からの引用終わり)



イスラーム大学的女子学生
(ウズベキスタン)

Photo by Kazuko Shiojiri

13:10-13:45

イスラーム教徒のイスラーム理解
その多様な可能性

青柳かおる (新潟大学准教授)

13:45-14:20

アッラーは世界の貌で現れる
スーフィズムの共生思想

東長靖 (京都大学大学院教授)

14:35-15:10

西欧との調和の可能なイスラーム
チュニジアの「アラブの春」への期待

私市正年 (上智大学教授)

15:10-15:45

政権を担うイスラーム主義
政権の打倒を目指す過激派イスラーム主義

山尾大 (九州大学大学院准教授)

日本中東学会 第21回公開講演会

イスラームの多様な貌

共生のための理解をめざして

2015年10月4日(日)

13:00-17:00

九州大学箱崎キャンパス

法文系共通講義棟101教室

地下鉄箱崎九大前より

徒歩 約7分

一般公開・無料

プログラムとアクセスの詳細は
こちらから

<http://www.james1985.org/>

中東学会 講演会 かお

主催：日本中東学会

共催：九州大学大学院人文科学研究所 文学部イスラーム文明史学研究室、
上智大学アジア文化研究所、上智大学大学院グローバル・スタディーズ
研究科地域研究専攻、東京大学東洋文化研究所、東京外国語大学

アジア・アフリカ言語文化研究所

後援：地域研究コンソーシアム、西日本新聞社

問い合わせ先：日本中東学会事務局 email: james@james1985.org

講演会ちらし (後藤絵美会員作成；塩尻和子会員写真)

このような趣旨にもとづき、当日は以下の4本の講演からなる豪華なラインアップで、イスラームの多様な相貌に迫りました。それぞれの講演時間は35分間でした。



会場の様子

青柳かおる「イスラーム教徒のイスラーム理解：その多様な可能性」

青柳講演は、以後の3本の講演全ての前提となるもので、イスラーム教徒によるイスラーム解釈の基本的な方法を解説するものでした。神の言葉であるクルアーンは絶対的な権威を持ち、それに反することは不可能ではあるものの、ハディースなどを用いたクルアーン解釈には多様な道がありえることを、ハラール概念や女性隔離の問題に関係する解釈の多様性を例にとりながら、分かりやすく解説しました。

東長靖「アッラーは世界の貌（かお）で現れる：スーフィズムの共生思想」

東長会長の講演は、スーダラ節あり、会長の（やや恥ずかしげな）踊りありのサービス精神にあふれたものでした。「性弱説」に立つイスラームの特徴から説き起こし、存在一性論についての難しいお話も巧みなたとえ話などで難くこなし、スーフィズムの思想においては、そもそもの他者という概念自体が表面的な現れのみに関係するものにすぎなくなること、しかし、そうではあっても実践の局面ではさまざまな争いごとが起こりうることなどが語られました。



講演する青柳かおる会員

私市正年「西欧との調和の可能なイスラーム：チュニジアの「アラブの春」への期待」

私市講演は、ブルギバ以降のチュニジアに根づいてきた穏健で調和的な志向をもつイスラーム理解、すなわち、男女平等、人権、民主主義といった思想とも折り合いをつけようとするイスラーム理解を紹介するものでした。棄教の自由をも認めるイスラーム解釈の実践が紹介された際には、会場から驚きの声があがっていました。チュニジアはたくさんの注目すべき人物を生み、多くの意義深い事件の舞台となってきたが、小国ゆえに忘れ去られてしまう（エジプトに手柄をとられてしまう）という講演冒頭の訴えは、共感的なアプローチによる地域研究が持つ人間的な温かみを感じさせるに十分なものでした。

山尾大「政権を担うイスラーム主義、政権の打倒を目指す過激派イスラーム主義」

最後に演壇に立った山尾氏による講演は、スンナ派・シーア派それぞれのイスラーム主義運動をいくつかのタイプに分類しながら、その全体的な見取り図を示すものでした。イスラーム主義運動が過激化する場合と穏健なまま留まることになる場合とを分かつ条件は何かという問いに関しては、運動と対峙する政権や「国際社会」の側のアプローチこそが重要になるという見解が表明されました。

締めくくりのセッション（1時間）では、企画を担当した森本一夫による「まとめ」のあと、事前に集めておいた質問票にもとづく質疑応答が行われました。



締めくくりのセッションの様子

当日は、3桁に達して欲しいという企画運営側の祈りを聞き届けてなおあまりある盛況で、また、事後のアンケート（半分ほどの方が提出してくださいました）でも、大体において大変好意的なフィードバックをいただきました。イスラームの多様性を理解するというそのこと自体は、非ムスリムが絶対多数を占める日本社会の市民がムスリムとの共生を考える際に必ず必要となる最初の一步です。そのことを伝えようと企画したこの講演会の目的が多く参加者に評価されたことは、大変ありがたいことだったと思います。

本講演会の開催にあたっては、九州大学のイスラム文明史学研究室にホスト役を引き受けていただき、現場での準備を全面的に担当していただきました。また、地域研究コンソーシアムには、学会連携プログラムの事業として採択していただき、企画をさらに改善する機会と資金援助をいただきました。また、西日本新聞社や福岡のさまざまな方々に、講演会に先だつての広報活動に大変なご助力をいただきました。共催諸機関を含め、こうしてご協力くださった諸機関・個人の方々に篤く御礼申し上げます。また、事務全般を取り仕切ってくださった飯野りさ会員、ポスター・ちらしを作成してくださった後藤絵美会員にも感謝いたします。

（森本一夫 企画担当理事）

第 32 回年次大会のお知らせと研究発表の募集

前号のニューズレターでお知らせいたしましたように、来年度の年次大会は慶應義塾大学（東京都港区三田 2 - 15 - 45）で開催されることになりました。大会の実施要項と研究発表の応募要項が下記のとおり決定しましたのでお知らせいたします。例年どおり、大会の 1 日目が公開企画と総会、2 日目が研究発表になります。

どうぞよろしく御参集くださいますようお願い申し上げます。

開催日時：2016 年 5 月 14 日（土）・15 日（日）

開催場所：慶應義塾大学三田キャンパス

実行委員会

委員長：長谷部史彦

事務局長：勝沼聡

委員：富田広士、野元晋、新井和広、藤木健二、岩崎えり奈、柳谷あゆみ、貫井万里、
太田啓子、杉山隆一、山口元樹、苗村卓哉、太田絵里奈、小野亮介

研究発表の応募要項は以下のとおりです。研究発表をお考えの方は、どうぞふっつてご応募ください。応募の締め切りは、12 月 25 日（金）とさせていただきます。

1. 研究発表

研究発表を希望される方は、12 月 25 日（金）までに年次大会実行委員会までメールにてご応募ください。メールアドレスは、james2016.keio@gmail.com です。

その際、下記の諸点についてお知らせください。

①氏名：漢字もしくはカタカナ表記

②氏名のローマ字表記

③所属：大学院生の場合はその旨を明記

④連絡先メールアドレス

⑤発表タイトル（仮題も可）

⑥発表内容の概要：日本語 400 字程度／英語 200words 程度。日本語か英語のいずれかで結構です。テーマと内容が明快にわかるように記してください。正式の「要旨」につきましては、実行委員会での採否の決定後、改めて発表予定者に執筆をお願いすることになります。発表の言語は、原則として、日本語か英語のいずれかとします。それ以外の言語での発表をご希望の場合は、実行委員会事務局までご相談ください。

⑦プロジェクター使用希望の有無：なお、プロジェクター以外の映像機器（OHP、現物投影機等）の使用をご希望の場合は、実行委員会事務局までその旨ご連絡ください。可能な限りご希望にそえるように致しますが、用意できない場合もありま

すことを予めご了解ください。また、プロジェクターに接続する PC については、発表者各自でノートパソコン等をご持参ください。実行委員会として、会場でのネットへのアクセス環境を準備することはできかねます。

※応募された方には、年次大会実行委員会から受信確認のメールを差し上げます。
受信確認メールが届かない場合は必ずご一報ください。

2. 企画セッション

第 32 回年次大会では、会員による企画セッションも募集します。特定のテーマに関する企画セッションの開催をご希望の方は、以下の要領でご応募ください。応募締め切りは、研究発表と同じく 12 月 25 日（金）です。

一つの企画セッションの持ち時間は、発表・コメント・質疑応答を含め 1 時間 30 分とし、発表者は 3 名程度とします。コメンテーター（討論者）をつけるかどうかは自由ですが、必ず 1 名の司会者が必要です。企画責任者・発表者・司会者はすべて日本中東学会会員であることとします。また、企画責任者は、発表者・司会者・コメンテーターのいずれかを必ず兼ねることとします。企画責任者が、発表者と司会者、あるいは、司会者とコメンテーターの二役を兼ねることもできます。なお、コメンテーターは非会員でも構いません。

企画責任者は、12 月 25 日（金）までに年次大会実行委員会までメールにてご応募ください。メールアドレスは、james2016.keio@gmail.com です。

その際、下記の諸点についてお知らせください。

- ①企画責任者氏名：漢字もしくはカナカナ表記とローマ字表記の双方
- ②企画責任者の所属
- ③企画責任者の連絡先メールアドレス
- ④使用言語：原則として、日本語か英語のいずれか。それ以外の言語をご希望の場合は、実行委員会事務局までご相談ください。
- ⑤企画セッションのタイトル
- ⑥企画セッションの主旨：日本語 400 字程度／英語 200words 程度。日本語か英語いずれかで結構です。
- ⑦参加者一覧：各参加者氏名の漢字もしくはカタカナ表記とローマ字表記の双方、所属、セッションでの役割。司会とコメンテーターは応募時点では未確定でも構いません。
- ⑧各発表者の発表要旨：⑥の企画セッションの主旨と同様の分量・要領
- ⑨プロジェクター使用希望の有無：なお、プロジェクター以外の映像機器（OHP、現物投影機等）の使用をご希望の場合は、実行委員会事務局までその旨ご連絡ください。可能な限りご希望にそえるように致しますが、用意できない場合もありますことを予めご了解ください。また、プロジェクターに接続する PC については、発表者各自でノートパソコン等をご持参ください。実行委員会として、会場での

ネットへのアクセス環境を準備することはできかねます。調整の都合上、企画内容等について、実行委員会から問い合わせや御相談をさせていただく場合があります。

※応募された方には、年次大会実行委員会から受信確認のメールを差し上げます。
受信確認メールが届かない場合は必ずご一報ください。

3. 託児所

託児所の利用をご希望の方は、実行委員会事務局までお申し出ください。申し込みの締め切りにつきましては、メーリングリストなどで追って通知いたします。

4. 宿泊について

東京都港区とその周辺の宿は常時混み合っております。年次大会に参加される予定の方は、十分な余裕をもって早めに宿を手配されることをお勧めいたします。

以上、何卒よろしくお願い申し上げます。

連絡先：

日本中東学会第 32 回年次大会実行委員会事務局

〒108 - 8345 東京都港区三田 2 - 15 - 45 慶應義塾大学文学部 長谷部史彦研究室

Tel : 03 - 5427 - 1125 (研究室直通), 03 - 3453 - 4511 (代表)

Fax : 03 - 5427 - 1578 (研究室事務室共用)

E-mail : james2016.keio@gmail.com

※可能な限りメールにてご連絡くださいますようお願い申し上げます。

韓国中東学会国際会議参加報告

2015 年 10 月 23 日 (金) から 25 日 (日) に、ソウルの韓国外国語大学およびプレジデント・ホテルで”Asian and Middle Eastern Countries since the End of World War II: Seeking for a New Partnership between the Two Regions”と題する第 25 回韓国中東学会国際会議 (2015 KAMES International Conference) が行われた。基調講演と本セッション発表者 25 名の内訳は、海外からの招聘者 14 名、韓国在住の外国人 3 名、韓国人 7 名で、文字通り国際色の豊かな会議で会った。今回の会議は韓国外務省の全面的な支援を受けており、そのことはアフリカ中東局長のクワン・ヒソック氏が 23 日の最初から 24 日の最後まですべての出席し、挨拶や司会を行ったことに象徴的に表れていた。

私は JAMES を代表して、森山央朗理事 (事務局長)、保坂修司理事と共に参加した。MAMES からは副会長の Lkhagvasuren Purev 氏が参加したが、CAMES は所用ができた

とかで一人の参加もなかった。その代わり、アジア以外からの参加者は多く、アラブ人8名（国別でいえばエジプト、イラク、クウェート、イエメン。内4名はイギリス在住）、イラン人2名、トルコ人、フランス人各1名であった。

23日は夕方から AFMA シンポジウムが行われ、KAMES、JAMES、MAMES の順で各国の中東研究の現状が紹介された。ここでは私が、三浦徹元会長が中心になって行った過去3回の JAMES メンバー調査を元に、日本の現状を報告した。それに引き続く質疑応答では、フロアにいる外国人も各国の中東研究の現状を紹介するよう求められ、国ごとの違いが浮き彫りになって興味深かった。日本の現状に関しては、やはり歴史学を専門とする会員が半数近いということが、参加者たちの強い関心を惹いていた。

翌日は、午前にオープニング・セッションと基調講演が行われた。この基調講演の内、1本目は KAMES 創立メンバーでもあるキム・ジョンウィ氏によるもので、長い中東研究の経験を元に、アジアと中東の関係について語った。2本目はテヘラン大学のセイイェド・モハンマド・マランディー氏によるものだったが、サウジアラビアをはじめ、より過激なイスラームの動きも含めてワッハーブ主義のもとにくくり、その現代の動きを批判する一方で、イランの政策を称揚するもので、基調講演としてはいささか公平さを欠くものであった（後のクロージング・セッションでもこの講演を批判する意見が述べられた）。

午前の後半と午後には、合わせて24本の発表が行われたが、午前は3部会（政治・経済・文化）、午後は4部会（上記に加えて情報コミュニケーション）に分かれたため、私はほとんど文化部会しか聞くことができなかった。

午前の文化部会には4本の発表が行われた。一つ目はムハンマド・アル=アスカリー氏（エジプト国籍、韓国在住）によるマクベスとエジプトのムバーラクを比較するもの、二つ目はチェ・ユンチョル氏（韓国）によるアラビア語資料に記された韓国朝鮮に関する古い記録を掘り起こしたもの、三つ目はユン・ウンギョン氏（韓国）による韓国のアリランとアラブのマウワールを比較したもの、四つ目はファーテメ・ユースフィー氏（イラン国籍、韓国在住）による現代中東各国における女性の置かれた位置をイランを中心に説明したものであった。いずれも韓国人による2本の発表は、この国際会議のタイトルが示すようにアジア（とくに東アジア）と中東との関係を中心テーマに据えた興味深いものであったが、単なる比較がともすると思いつきのレベルにとどまってしまう（たとえば、本セッションのマクベスとムバーラクの比較は無理があると思われた）のに対し、歴史史料を丹念に掘り起こした発表はより説得力をもつものであった。

午後の部会には3本ずつが配された。JAMES の森山理事は文化部会の最初に登壇し、日本における中東のイメージを三浦徹元会長や店田廣文会員の調査を元に語り、偏ったイメージの原因を「彼ら（中東のムスリム）は特異であるという感覚」と「日本的オリエンタリズム」に求めた。後者の概念は大きな関心を集め、質疑応答やクロージング・セッションでも取り上げられた。

ついで二つ目は経済部会に移り、JAMES の保坂理事の発表を聞いた（文化部会の 2 本目は KAMES のキム・スワン氏によるものであったが、今年 5 月の JAMES 年次大会で発表されたのと同じテーマであった）。明治以降の日本と湾岸諸国の間の貿易の実態を、日本外務省や英国の India Office Library に残る文書を用いて跡づけたもので、私にとっても新たな発見を多く含むものであった。翌朝の朝食時に、たぶん日本人の顔は同じに見えるからであろう、あるアラブ人からあなたの昨日の発表は資料を豊富に使っていておもしろかった、と私が代わりに賛辞を受け取った。

最後は再び文化部会に戻り、マフムード・カイスィー氏（イラク）が、イラクの新聞で韓国の情報がどのように伝えられているかを詳細に発表した。日本はともかく、韓国についての情報は私たちもフォローしていないので、耳学問として興味深かった。

この日の部会終了後には、Cultural Events として韓国の太鼓演奏と、韓国人グループによるベリーダンスが披露された。ベリーダンスが始まると、ベールをした女性 2 名と男性 1 名が不快感を示すためか、部屋を出て行ったが、同じベールをした女性でも中に残り、動画を撮る人もいたのは興味深かった。しかし、ムスリム・ムスリマを数多く招待したこの会議でベリーダンスをわざわざ行事に組み込むことについては議論の余地があるように思われた。ちなみに、この日の昼食はおいしい鴨肉の串焼きであったが、この際にもビールが供され、これにもやや違和感を感じた（もっとも、この日発表のない私自身は、おいしく頂戴した）。

今回の国際会議に参加して、JAMES の代表として気づいたことがいくつかある。一つは、多くの KAMES 関係者から、板垣先生、佐藤先生、長澤さん、臼杵さん（称号はいずれも先方が使ったまま）を初めとする多くの JAMES 関係者との共同研究や人間関係の記憶が語られたことで、先人・先輩たちの築いてくれた長年にわたる強固な協力関係のうえに、現在の JAMES の国際交流は成り立っているということであった。この点では、せっかく AFMA に参加している CAMES の腰が最近引けているように見えることは、彼らとのあいだにも長年にわたる信頼構築の努力がなされてきたであろうことを考えると、残念である。

第二は、以前からそういう傾向はあったが、今回は完全に外務省を巻き込む形で会議の運営が行われたことで、上述の外務省局長を初めとする外務省職員が参加するとともに、モロッコ王国駐韓大使も挨拶にかけつけた。これは主として、韓国の中東学会が経済と政治の専門家を多くもち、実際の現代韓国・中東関係の分析に従事していることを反映しているが、執行部としては豊富な財源を引き出すための方法でもあるようである。当初のプログラムでは中東各国大使と私たち会議参加者を集めたラウンドテーブルが最終日に行われるはずだったが、おそらく大使たちが誰も来てくれそうにないために取り消しになってしまったことは残念であった。

第三は、上記の豊富な財源のせいもあるが、きわめて手厚いサービスが参加者に提供されたことである。ホテルも街の中心部にある特 2 級ホテル（最高級の特 1 級の次のクラス）が用意され、昼食・夕食はいずれも趣向をこらしたもので、ソウル市内のエクスカッションも 3 日目には組まれた。JAMES では、官民を問わず、寄付金を集め

る努力を積極的にしようという方向にはなっていないので、この種のサービスを韓国と同程度にふるまうことは難しいであろう。個人的には、学術的な内容こそが重要で、ホテルや食事、エクスカージョンはおまけのようなものだから気にしなくてもいいとは思うものの、実際に歓待を受けて次に日本に招待するときに気が引けることは確かである。

来年は、AFMA の大会がモンゴル・ウランバートルで開催されることになっており、MAMES のプレヴ氏がさかんに歓迎の意を表していた。アジアにおける中東研究学会の連帯と学術的競争・協力関係を築くためにも、多くの JAMES 会員の参加を期待したい。

(東長靖 会長)

『日本中東学会年報 (AJAMES)』編集委員会報告

1. 31-2 号 現在編集集中

31-2 号では、論文 6 本 (うち特集論文 4 本)、研究ノート 2 本、書評 2 本、博士論文要旨 2 本が採用されました。また、昨年 12 月に開催された AFMA 大会のペーパーを掲載する予定です。現在、来年 1 月の刊行を目指して編集作業を鋭意進めております。

2. 32-1 号 投稿募集中

32-1 号の締切は 12 月 1 日です。論文、研究ノート、書評等さまざまなジャンルでの投稿をお待ちしております。とくに欧文での投稿を推奨、歓迎しております。また、英文による特集の企画がありましたら、ぜひご投稿ください。

3. 博士論文要旨

AJAMES では、会員による中東関連の博士論文要旨 (英文) を掲載しています。とくに締切を設けておりませんので、最近博士論文を提出された会員の方は、随時ご投稿ください。また、お近くに中東関連で博士論文を提出された方がいらっしゃれば、ぜひ投稿を呼びかけてください。

本誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下のとおりです。

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40

日本大学文理学部史学科 粕谷元気付

『日本中東学会年報』編集委員会

ajames-editor@james1985.org

(AJAMES 編集委員長 粕谷 元)

寄贈図書

【単行本】

高やすはる『ワールド・トラベラーだけが知る素顔のイスラム』新潮社図書編集室、

2015 年

————『272 の国と地域を制覇した 77 歳のワールド・トラベラーはたった 1 人で
紛争地を旅した』幻冬舎、2015 年

永田雄三・江川ひかり『世紀末イスタンブルの演劇空間：都市社会史の視点から』白

帝社（白帝社アジア選書 012）、2015 年

フランソワ・ポール・ブラン『イスラーム家族法入門』小林公他訳、木鐸社、2015 年

MIURA Toru & SATO Kentaro (eds.), *The Vellum Contract Documents in Morocco in the
Sixteenth to Nineteenth Centuries, Part I*, Tokyo: The Toyo Bunko (Toyo Bunko Research
Library 15), 2015.

【逐次刊行物・ジャーナル等】

『イスラーム地域研究推進事業（第 2 期）実績評価報告書』人間文化研究機構、2015
年

『季刊アラブ』154 号（特集 中国と中東）（2015 年秋）

『国立民族学博物館 要覧 2015』国立民族学博物館、2015 年
Dānah（『日本クウェイト協会報』）、第 234 号（2015 年 10 月）

会員の異動

【新入会員】（2015 年 8 月以降）

斉藤 真美子

田島 和歌子

大森 真則

【所属先・連絡先の訂正・変更】（2015 年 6 月以降連絡）

鮎合 真介

泉沢 久美子

稲山 円

勝沼 聡
河原 弥生
川村 藍
金城 美幸
栗田 禎子
黒田 卓
斎藤 富美子
塩崎 悠輝
鈴木 恵美
高尾 賢一郎
常陸 民生
中川 恵
馬場 多聞
丸山 大介
水島 多喜男
村上 薫
柳谷 あゆみ
渡邊 祥子

事務局より

聖心女子大学から同志社大学に事務局が移転して、半年が過ぎました。この半年で、事務局の日々のルーチンは何とか回るようになりましたが、それ以外の「イベント」への対応は未だに不慣れな点が多く、皆様にはご迷惑をおかけしております。事務局長と事務局補佐の双方が新人であることに加えて、事務局の所在地が東京から京都に移動したことで、これまでに蓄積されたノウハウの伝承に弱い部分が散在していることも、色々な事務作業が遅れがちな一因となっています。という言い訳をしつつ、会員名簿と本ニューズレターの大会報告号（第 140 号）印刷版のお届けが遅れておりますことをお詫び致します。今しばらくお待ち下さい。

（森山央朗）

編集後記

本学会の公開講演会も、第 21 回となりました。もう 20 回を超えたんだと思っておりましたら、ニューズレターも本号で 141 号。発行が 140 回を超えました。公開講演会もニューズレターも、これまでの多くの方々の手によって続けられ、さらに多くの方々のご協力、ご支援によって形作られてきたものです。ニューズレター担当の私が書くのはおかしいかもしれませんが、とにかく、本学会に関わるいろいろなことが長く続くといいなと思いました。

本号掲載の韓国中東学会国際会議への参加や本学会の年次大会も、もちろん活発で有意義な活動が続いているものですね。来年の年次大会の研究発表募集が始まりました。例年通り、皆様の積極的な応募を期待しております。どうか、よろしくお願いいたします。

(松本弘)